

池大雅の「王維詩意図双幅」における長寿の象徴

李 田 (早稲田大学)

池大雅(1723~1776)による「王維詩意図双幅」(静嘉堂文庫美術館所蔵)は「輞川閒居図」と「終南別業図」の二幅から構成され、唐代の詩人・王維の詩「輞川閒居」と「終南別業」を画題とした作品である。本作は、絹本に青緑山水の描法を用いて描かれ、各図には池大雅自身が草書体で記した題画詩が添えられている。その内容から、いずれも王維の隠棲生活の情景を視覚化したものと考えられる。本発表では、本作に見られる画譜や明代絵画の影響を検討するとともに、構図やモチーフに着目し、その背後に秘められた「長寿」という象徴性について考察する。

本作品は「雲林清暎図」や「蘭亭曲水・龍山勝会図」などの基準作との比較から、大雅が三十代中期から後期に制作した可能性が高いと推測される。また、各図の前景には対称的に巨大な樹木が描かれている点が注目される。「輞川閒居図」では松が描かれているのに対し、「終南別業図」の樹種については、大雅の『芥子園画伝』をもとに描いた「画式四種」に収録されている「山水樹式図」の「椿」と比較検討した結果、この樹木が中国では椿と呼ばれるものであることを明らかとする。椿は日本のツバキとは別種の樹木であり、中国において長寿の意味をもつ。さらに、明代の画家・呉筠の「古石長椿図」との関連性も検討する。呉筠のこの作品は、明和三年の「同仁齋書画展観目次」に記録されている。前景に椿、背景に高山を配置した構図が特徴であり、大雅はこの作品を参考にした可能性が考えられる。また、「終南別業図」に描かれた椿を、『芥子園画伝』に記載された椿葉や樹木と比較した結果、本作がその描法を取り入れていることも確認された。

本作における松・椿・終南山といったモチーフが持つ長寿の象徴性について、宋・明代の絵画「寿椿図」や「椿萱図」、および詩文における『莊子・逍遙游』に見られる椿の用例を比較参照すると、椿が長寿を象徴する存在であることが確認でき、大雅はその象徴性を十分理解していたと思われる。また、松と椿を祝寿の要素として詠んだ詩「借指松椿比寿」などの詩句があることから、本作における松と椿の祝寿的意義が裏付けられる。さらに、背景に描かれた終南山については、「天保九如」における長寿の意味を重ねることができる。本作において松・椿・終南山の三要素が画面上で調和的に配置され、視覚的に長寿を祝うメッセージが表現されていると考えられる。

本作は祝寿図としての意図を明確にするとともに、王維の詩に詠まれた隠居地であり長寿の象徴でもある終南山を軸に構想を練った点で、大雅の脱俗性が示されている。文人画特有の隠逸の主題と祝寿図の要素を巧みに融和させている作品となっている。三十代の大雅は、中国の画譜や作品を参照しながら、王維の詩を展開させて独自の再創作を行ったと推察される。